

聽されているなどの被害妄想を呈した症例を我々は経験したので報告する。69歳時にミニメンタルテスト24点、CDR 1であった。本例の発症にサリンへの暴露、心的外傷が関与していた可能性も考えられる。

7. 進行性多巣性白質脳症に対するhighly active antiretroviral therapy (HAART)

島田 齊、三澤園子、平野成樹
鈴木浩二、新井公人、服部孝道
(千大)

横幕能行、猪狩英俊、佐藤武幸
(同・感染症管理治療部)

症例は36歳男性、右片麻痺と失語で発症し、進行に伴って多彩な高次機能障害を認めた。入院後AIDSに伴うPMLと診断され、HAARTを施行したところ、一時的に臨床症状の増悪を認めたが、その後の免疫能の改善とHIVウイルス量の減少に伴って、臨床症状の進行に抑制が認められた。HAARTは宿主の免疫能を改善し、AIDS関連PMLの進行を抑制する可能性が示唆された。

8. 皮質異形成に伴う持続性部分てんかん：MRI及び運動野磁気刺激所見の特徴

濱谷和幹、三澤園子、平野成樹
新井公人、桑原 聰、服部孝道
(千大)

皮質異形成に伴う持続性部分てんかんの31歳女性。頭部MRIでは患側運動野の皮質形成不全と直下の髓鞘形成不全が示唆された。運動野磁気刺激では患側運動野の興奮性増大と錐体路の伝導遅延が示され、頭部MRIでみられた形態学的異常と機能異常の対応がみられた。また、経頭蓋連続磁気刺激により発作の軽減がえられ、部分てんかんの磁気治療の可能性が示された。

9. ヘルペス脳炎後に意味記憶障害を呈した1例

三宅英理、小河原一恵、上司郁男
(千葉労災)

47歳男性。ヘルペス脳炎に罹患し、MRI上左側頭葉に病巣を認めた。多彩な高次脳機能障害を呈したなかで意味記憶障害が特徴的であった。また、頭頂葉障害がなかったため意味カテゴリー別では身体、屋内部位名の障害が軽度であった。さらに自伝的記憶は保持されているが、意味記憶に近いかたちで処理される社会的出来事記憶は障害されていた。

10. HLA-B51陽性でステロイド減量により脳脊髄炎を繰り返した1例

増田冴子、小松幹一郎、平賀陽之
北野由紀子、山中義崇、新井公人
(千大)

症例は38歳女性。上気道炎に引き続き2ヶ月の経過で構音障害、複視、MRI上延髄、頸髄の髓内異常信号を伴う脊髄症、末梢神経炎を呈した。症状はステロイド反応性であったが軽快後も脳脊髄液の細胞数增多が持続し、減量にて2度再発した。HLA-B51陽性と口内炎の既往よりBehcet病を疑った。Behcet病では稀に神経症状が全身症状に数年先行することがあり、今後も全身症状の出現に注意する必要がある。

11. Churg-Strauss症候群に伴った肥厚性硬膜炎

藤沼好克、金坂俊秀、溝渕敬子
服部孝道
(千大)

喘息、好酸球増加、多発单神経炎にて発症したChurg-Strauss症候群に対し、ステロイド60mg内服治療が行なわれ、症状は改善しステロイドは20mgまで漸減された。その後、髄膜刺激症状、多発脳神経麻痺が出現し、造影MRIにて眼窩内腫瘍を伴う肥厚性硬膜炎と診断された。ステロイドパルス療法及びステロイド60mg内服により症状が急速に改善した。

12. 変動する意識障害、down-beat nystagmusを呈した橋本脳症

田村典子、吉川由利子、小松幹一郎
伊藤彰一、片山 薫(成田赤十字)

症例は83歳男性。急性の健忘、見当識障害で発症し、当初、傍聴性辺縁系脳炎が疑われた。経過中、変動する意識障害、緩徐言語、Down-beat nystagmus、ミオクローヌス、小脳性運動失調が出現し、健忘症状も増悪した。抗甲状腺自己抗体高値より、橋本脳症と診断し、ステロイド療法を行ったところ著明な改善を認めた。当症例は、高齢発症で多彩な神経症状を同時期に呈したことが特徴的であった。

13. Wearing offが著明で治療が困難であったParkinson病の1例

白井和佳子、平賀陽之、溝渕敬子
磯瀬沙希理、新井公人
(千大)

経過8年のParkinson病、49歳女性。発病5年目より瞬時に切替わる著明なwearing off現象が出現。切替わり時に有痛性ジストニアを伴いon時はYahr Iだがジ